

音訳真言の訓点について : 悉曇学と比較して

蛭沼, 芽衣
九州大学人文科学研究院 : 助教

<https://doi.org/10.15017/7325728>

出版情報 : 語文研究. 135, pp.62-49, 2023-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



音訳真言の訓点について

— 悉曇学と比較して —

蛭 沼 芽 衣

1. はじめに

「儀軌」と呼ばれる密教の供養の儀式次第を説いた一連の經典には、悉曇文字やそれを音訳した真言・陀羅尼（以下、この二つを区別せずに真言とのみ称す）などと呼ばれる梵語の呪文を多く持つ。これらの資料群を含む訓点資料は、これまででも多くの研究者によって研究されてきているが、研究の対象となるのは漢文部分に記された訓点がほとんどで、真言部分の訓点について十分に研究されているとは言いがたい。それは漢字との対応だけでなく、その奥にある梵語をも意識しなければならないからだろう。「訓読」ではなくなるため、直接的に日本語を反映しているわけでもない。しかし、留学もままならなかった当時の状況下で、日本人が独自に学習し、加点了情報である以上、何らかの日本語的感觉が反映されているはずである。

本稿では、九州大学所蔵の儀軌類を用いて、音訳真言の訓点の性質について考察してみる。

2. 梵語の漢訳と訓点

2.1. 梵語の音韻体系

音訳真言は梵語の經文を漢文に訳するのではなく、音だけを漢字で写し取ったものである。そこでまず經典の原語である梵語の音韻体系について簡単に紹介する。

(1) 母音

a ā i ī u ū ṛ ṝ ḷ ḻ e o ai au

(2) 子音

a. 破裂音と鼻音

	無声 無氣音	無声 有氣音	有声 無氣音	有声 有氣音	鼻音
喉音（軟口蓋音）	ka	kha	ga	gha	ṇa
口蓋音	ca	cha	ja	jha	ṇa
反舌音	ṭa	ṭha	ḍa	ḍha	ṇa

齒音	ta	tha	da	dha	na
唇音	pa	pha	ba	bha	ma

b. 半母音

ya	ra	la	va
(口蓋)	(反舌)	(齒)	(唇)

c. 齒擦音

śa	ṣa	sa
(口蓋)	(反舌)	(齒)

d. 氣音

ha

(2) の子音字を悉曇学では体文と呼ぶ。ラテン系のそれとは異なり、必ず母音 a を伴った音節文字である。(2a) は口腔内に閉鎖を伴う音で、調音位置によって五種類に分類され、それぞれ無声無気、無声有気、^(注2) 有声無気、有声有気という発音様式をもつよっつの閉鎖音と鼻音とにわかれる。悉曇学では、これらをまとめて「五類声」などと呼ぶ。一方、(2b、c、d) は閉鎖を伴わない音で、悉曇学ではこの 8 字を一類とみなし、「遍口声」などと呼ぶ。

(1) の母音のうち ai u ṛ ḷ のみ短母音で、他は長母音である。子音字が a 以外の母音を伴う場合は、各母音記号を組み合わせることで作られる。また、重子音字を構成する場合にも子音字のパーツを組み合わせせて字をつくる。この作業を悉曇学では「切継ぎ」という。

(3) 母音の切継ぎ

ka	+	(	→	ki
		-i		

2.2. 梵語の漢訳

印度から中国に渡った仏教経典は、多くの場合漢文に翻訳（意訳）された。ただし玄奘が「不翻」としたように、一部の文や語はサンスクリット（sanskṛt：梵語）の音をそのまま写すために、しばしば漢字によって音訳される。

(4) 観智儀軌^(注4)

梵：	na	maḥ	sa	man	ta	bud	dhā	nāṃ	p	ṛ	thi	v	ye	s	vā	hā
漢：	囊	莫	三 ^去	滿	多	沒	駄 ^引	南 ^引	畢	哩 ^{二合}	體	微	曳	娑	嚩 ^{二合引}	賀 ^引

だが、漢語と梵語には音韻体系や音節構造に性格の違いがあるため、たとえば(5)のように、音訳の際には様々な工夫がなされている(沼本2003より一部抜粋)。

- (5) a. 梵語には la と ra の区別があるが漢語にはこれがないため、「羅」対「囉」のように、口篇を加えるなど、表記の仕方を工夫することで表す。
- b. 梵語では音節頭の重子音が許されるが漢語では許されないため、梵語の重子音は「二合」という注記によって表す。
- c. 梵語では、母音の長短の区別があるが漢語にはこれがないため、長母音には「引」や声調などの注記によって表す。

水谷(1994)は、梵語を音写する際の漢字の声調の活用について、時代ごとの変遷を考察している。これによると、最初は声調の違いによって母音の長短を区別していたものが、次第に梵語のアクセントや有声有気音などの区別にも利用されるというような細分化がされていった。やがて、不空(747入唐-771まで訳業に従事)に至って、(5)のような方法が確立され、それ以降はこの方法に倣っているようである。

2.3. 漢訳真言と訓点

仏典が日本に伝来すると、漢文に翻訳された経文を訓読するとともに、漢字に音訳された梵語も読誦されるようになる。ただし、平安初期の訓点資料にて、真言に加点したものが見られないため、沼本(1986)は、初期においての真言の読誦は「おそらく口授口承のみに留まった」ものであろうと推測してる。しかし、特に密教において、真言の読誦と理解が重要なものであったため、これらを正確に音読できるように、その学習と研究、すなわち悉曇学がおこり、真言への加点資料もこのころから見られるようになるという。

沼本(1986)によると、初期に差された^(注6)朱点では、梵語原音の有声・無声や有気・無気の区別、原語の末尾子音の注記などが施されており、「当時の天台宗円仁学統では陀羅尼の音読が、原音研究の成果としてかなり忠実に行われていた」と述べ、悉曇学の成果が正しく反映されていたとする。しかし、このような梵語原音の特徴を声点に反映させるのは、悉曇学においてのみ伝承されていたものであって、悉曇学から離れたところでは、このような加点方法は次第に崩れていったようである。

沼本(2003, 2012)では、悉曇学書・陀羅尼集・儀軌訓点資料の三種類の資

料について、梵語に差された声点がどのような性質を持っているのか、それぞれの特徴を示している。そのうち儀軌訓点資料についてまとめると以下の通りである。

- (6) a. 時期的に早い資料（9C 後～11C 前）は、資料ごとに相違が大きく、平安初期末から平安後期初頭までの陀羅尼の音読は加点者ごとに区々であった。
- b. 11C 後期の資料（天台宗）では、山門・寺門でやや異なるが、かなりの共通性が認められ、平安後期中葉にある程度陀羅尼の音読が伝承期に入つたと考えられる。
- c. 12C 以降の資料（真言宗）にはほとんど差異がなく、院政に入つて陀羅尼の読み方も明瞭な伝承期に入り、固定化したことを示している。
- d. これらの資料では、悉曇学のような、梵語の母音の長短を声調で区別するといった使い分けは見られない。一方で、入声点が加点されていることから、漢字音の声調による加点であるといえる。これらから、それぞれの宗派や学派の祖師ごとに随意的読み方がなされ、読誦の際に自ずと伴われた漢字音の声調に合わせて、声調が加点されたものであると考えられる。

沼本氏は真言を使用した研究をおこなっているが、主に声点を対象としており、仮名点への言及はない。そこで、印漢日の上記のような特徴をふまえて、音訳真言にみられる仮名点の性質をみていくことにする。

3. 真言の訓点

3.1. 資料について

使用した資料は以下のとおりである。資料によって加点の量や質が異なるが、用例を多く取るために、ヲコト点の種類や加点の質などは考慮しなかった。

- (7) a. 『成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌』(觀智儀軌)^(注7)
不空訳、西墓点、寛徳二（1045）年写本
- b. 『金剛瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌經法』(千手儀軌)
不空訳、西墓点、永久四（1116）年写本
- c. 『大毘盧遮那成仏神變經卷第二〔菩提幢密印標熾曼荼羅品之二〕』(胎藏儀軌)^(注8)
訳者不明、西墓点、天承二（1132）年加点本
- d. 『金剛頂瑜伽蓮華部心念誦儀軌』(金剛界儀軌甲)
不空訳、西墓点、長承三（1134）年加点本

- e.『金剛頂瑜伽蓮華部心念誦儀軌』(金剛界儀軌^(注9)乙)
不空訳、西墓点(識語等なし)
- f.『大聖名吉祥菩薩秘密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法』(妙吉祥菩薩儀軌)
浄智金剛訳、東大寺三論宗点、元永二(1119)年加点点
- g.『金剛手光明頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品』(聖無動威怒王立印儀軌)
不空、遍智訳、東大寺三論宗点、久安六(1147)写本
- h.『大毘盧遮那成佛神變經卷下 菩提幢密印標幢曼荼羅品之二』(大毘盧遮那広大成就儀軌)
訳者不明^(注10)、東大寺三論宗点、承安三(1173)写本
- i.『大聖妙吉祥菩薩秘密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法』(八字文殊儀軌)
浄智金剛訳、浄光房点、永久三(1088)年写本
- これらは(6)でいうところの「伝承期」の資料となる。

3.2. 真言の読誦音

中国における梵語の音訳から、日本での読誦(加点点)法について2章で概観した。では、具体的にはどのような音を反映しているのか。

まず声点からみる。沼本氏は(4d)のように、入声点の加点点から漢字音の声調であるとしている。しかし、入声点の加点点はごく一部であり、入声字でないものに差されていたり、逆に入声字に他の声点が差されたりしている。他にも原音声調とは異なる点が差されていたり、同じ字に異なる声点が差されたりしている例が多数現れる。(8)は胎藏儀軌の例であるが、このように原音と異なる差声は、(7)のすべての資料でみられる^(注11)。つまり、音訳真言の声点は、漢文部分に差されたものと異なり、何らかの字音体系を反映したものではないことがわかる。^(注12)

(8) 胎藏儀軌中の「惹」(原音は入声)の差声

- a. 平声点：5例
- b. 上声点：21例
- c. 去声点：2例
- d. 入声点：0例

(8)のような差声からは、原音声調と異なっているだけでなく、複数の調類にまたがってあらわれていることもわかる。そのため、漢字対声調の関係で見

てしまうと、一見どのような字音体系を有しているか判然としなくなる。しかし、原梵語を基にした「単語」としてのまとまりで捉えると、音訳真言の声点は、単語ごとにある程度固定化した音調を示していたようであることがわかる。^(注13)

(9) jñā の表記と差声

- a. 枳孃 [上上] (千手儀軌)
- b. 枳孃 [上上] (胎藏儀軌)
- c. 枳惹 [上上] (金剛界儀軌 甲)

漢字音でないことは、真言の仮名点に字音の体系ではあり得ない読みがあらわれるところからもうかがえる。

(10) 胎藏儀軌 金剛界儀軌 (甲)

nir	jā	ta	ra	t	ne
涅槃	惹	多	囉	怛	寧
ニリ			アラ		ネイ

「ニリ」や「アラ」は漢字音として存在しない形である。梵原語の nir や ra を意識した読みのため、このような形があらわれ得たのだと考えられる。^(注14)

一方で、漢字に引きつけられた読みも見られる。

(11) 金剛界儀軌 乙

che	da
砌	那
セイ	ナ

(11) では、梵原語は da であるが、音訳漢字の「那」に引かれて「ナ」と読んだものと考えられる。これらのことから、当時の僧侶にとって、真言は漢字で書かれた梵語という認識があり、梵語として捉えようとしていたことがわかる。しかし、その理解は漢字を通して行われたものである以上、漢字の影響は免れなかった。

4. 五十音図と真言の仮名点

4.1. 真言における v- の捉えかた

五十音図の起源について、悉曇学由来か音韻学由来かの議論もあるが、少なくとも現行の五十音図は悉曇学が大きく影響したものといえるだろう。悉曇文

字と五十音図のそれぞれの排列を見ると、下のように対応しており、悉曇章から日本語に必要な音を抜き出したものと考えられるからである。^(注15)
^(注16)

(12) 悉曇章と五十音図

a	ā	i	ī	u	ū	e	ai	o	au										
ア		イ		ウ		エ		オ											
ka	kha	ga	gha	ṇa	ca	cha	ja	jha	ṇa	ṭa	ṭha	ḍa	ḍha	ṇa	ta	tha	da	dha	na
カ					サ										タ				ナ
pa	pha	ba	bha	ma	ya	ra	la	va	śa	ṣa	sa	ha							
ハ					マ	ヤ	ラ	ワ											

悉曇学書中には、悉曇文字とともに書かれた五十音表などもあり、多少の異同はあるもの、大体上のような対応になっている。

本稿で注目したいのは va とワ行の関係である。半母音でありながら、真言の声点に濁音を表したと考えられる複声点が多く差されている。^(注17)では、この音を実際はどうのように読んでいたのか。v- に充てられた漢字の仮名点は、下表のようなバリエーションであられる。^(注18)

(13) v- に対する仮名点出現数^(注19)

ハ	ハイ	ハケ	ハム	ハラ	ハリ	ハル	ハン
60	5	1	20	2	4	1	3
ヒ	ヒウ	ヒチ	ヒン	フ	ヘイ	ホ	ホウ
11	1	1	1	2	12	2	2
マ	マイ	ミ	ム	ラ	ラハ	その他	
1	1	2	1	1	1	2	

(13) の表から、v- をワ行で読んだ例がないことがわかる。また、v- 以外であつてもワ行の仮名点は現れない。va の発音方法については、たとえば円仁の「在唐記」で次のように説明されている。

(14) 在唐記

- a. ba 以本郷婆字音呼之。下字亦然。
- b. bha 以本郷婆音呼之。但断气。
- c. va 以本郷婆字音呼之。向前婆字是重、今此婆字是軽。有人以唐国縛音呼之

(14c) 「向前婆字」とは、ba 字のことである。つまり va と ba の違いは軽重（閉鎖度）であるという。悉曇章における対注漢字では、時代にもよるが、並

母、明母、奉母、微母などが使われることから、梵語の va の音価は [β] ～ [v] に推定されることが多い。しかし、在唐記の記述にしたがえば、va も ba も、ともに同じ婆字によって説明できる音であった。

それは真言の仮名点からも確認できる。

(15) b- / bh- に対する仮名点出現数^(注20)

ハ	ハム	ハン	ヒ	ヒキ	ヒヤ	ヒヤウ	ヒユ
14	4	4	17	1	5	1	1
ヘイ	ヘン	ホ	ホウ	マン	モ		
4	1	16	7	5	2		

(13) の表と比べたとき、原語の形態が異なるため全く同じ形とはいかないものの、(13) と同様にハ行（マ行）による仮名点^(注21)があらわれている。ここから、v も b (bh) も日本人には等しく「バ」行音に聞こえていたことがわかる。つまり、五十音図を作成したような、悉曇学の「研究」の場とは別に、読み上げを中心とした「実用」の場では v と b (bh) は区別されていなかったということになる。

4.2. 悉曇学の va 理解

前節で、音訳真言の v- の仮名点から、読誦法が悉曇学の理解と異なっていたのだろうと考えた。しかしおそらく、悉曇学でも ba と va の音の違いは、正しく理解されていなかったのではないと思われる。

(16) 梵字形音義

a.	ba	bā	bi	bī	bu	bū	be	bai	bo	bau	baṃ	baḥ
	婆 _{ハア}	ク _引	毘	ク _引	蒲		蔽	吠	菩			梵
b.	va	vā	vi	vī	vu	vū	ve	vai	vo	vau	vaṃ	vaḥ
	婆	ク _引	毘	ク _引			吠	癖	菩			梵

『梵字形音義』は明覚（1056- ?）によって著された、悉曇章をあげて発音と意味を説いたものである。(16a, b) は、悉曇章第一章（母音のみの切継ぎ）の梵字の読みかたを漢字で示していったものであるが、b- にも v- にもほとんど同じ漢字が当てられていることがわかる。これらのあて字の典拠が示されていないため、この表記が中国悉曇学に依拠するものか、明覚が自分で整理したものかは不明であるが、中国悉曇学の影響であったとしても、このような実態がそばにあれば、音の違いに気づくのは難しいだろう。しかし、ba と va は別々に

あらわされ、五類声と遍口声という異なるカテゴリーに分類される。ba が日本語の /h/ に対する濁音 /b/ と同等の音という認識に対して、va の音についてしばしば議論があったようである。ba との違いを理解するために、古い漢訳や悉曇章に求めた記述がみられる。

(17) 悉曇要集記^(注22)

- a. ba 婆 [罷下反、輕音、与下字異也]
- b. va 縛 [房下反、字下尖、与前異也、又有一音云和]

(18) 悉曇大底

文殊問経云、va 𑖦 [无可 / 反] 則是^{ニコレル}濁音也。又音和者和^ニ字^ニ可有二^キ音。若以^テ漢^ノ音^ヲ呼之^ヲ禍^ノ音也。(中略) 或用^ル呉^ノ音^ヲva 和 vi 韋 ve 衛等^キ音是也。

『悉曇要集記』は寛智(1045?-?)の著書、『悉曇大底』は『梵字形音義』と同じく明覚の著書で、ともに悉曇学の諸説を説明したものである。(17)『悉曇要集記』では『悉曇字記』を、(18)『悉曇大底』では「文殊問経」を引いて va の説明をしているのであるが、いずれにも又音として「和」があらわれている。特に『悉曇要集記』が引用する『悉曇字記』は、唐の智広が著した梵語の切継ぎについて説明する悉曇章のひとつであるが、日本の悉曇学に与えた影響が大きく、『悉曇字記』に「和」の又音注があることは、この音を理解するうえで重要だったと考えられる。

ba と va の区別は、中国における漢訳の段階でも難しかったようである。たとえば「婆」字は真言中で ba、bha、va いずれにもあてられている。これは音だけの問題ではなく、悉曇文字にも原因があると考えられる。悉曇文字で ba は「𑖦」、va は「𑖧」であり、字形が酷似している。悉曇章のように順序よく並んだ字であれば、序列に従って理解すればよいが、真言のように文となると広範な語彙や文法の理解も必要になってくる。『悉曇要集記』の「与下字異也」「字下尖、与前異也」もこの字形の類似を注意したものである。

馬淵(1984)では、悉曇章中の音訳漢字から、漢字音や梵音の通史的考察をしている。これによると、va 字は、梁代で「和」「𑖦」であらわされていたが、唐代以降「𑖦」に一定してくるという。「和」「𑖦」はさらに「音蒲可反宜𑖦上唇呼之」や「音滿可反宜𑖦上唇呼之」といった反音注が付けられており、ここから「これが歯唇破裂音であることはあきらかで、[v] の音であった」と馬淵

氏は述べる。ただ、この音注がなければ「和」はふつう匣母字であり、(18)にあるように日本では漢音でクワ、呉音でワと読まれる字である。そのため va は、唇歯音をもたない日本人にとって、理解しにくい音であったと考えられる。さらに悉曇章から日本語の五十音を抜き出すにあたって、音を重視してしまうとワ行の置きどころがなくなってしまう。このようにして va とワが結びついたものと推測される。つまり、「va - ワ」の対応は梵語や日本語の発音の観察に基づいたものではなく、弁別のための処置であったと考えられるのである。

4.3. ka と ha

真言の読誦と、悉曇学の分類とで異なるのはカ行にもいえる。真言から母音^(注23)ã における梵語喉音の仮名点をみると次の表のようになる。

(19) 喉音字の仮名点^(注24)

	カ	キヤ	コ
kã	1	9	0
kha	0	6	0
ga	0	14	0
ghã	0	7	0
hã	7	1	1

直音「カ」であらわれるのは ha であり、ka は拗音「キヤ」で読まれていたことがわかる。このような読みは真言だけではなく、悉曇学書にもみられる。

(20) 悉曇大底

a. ka kha ga gha ña ha
 迦^{キヤ} 佉^{キヤ} 伽 伽^{重音キヤン} 哦^{キヤ} 訶^カ

b. ka 等^ノ五字（略）若依^{ラハ}漢字本音^ニ、即是中天之音也。皆終^リ有 ya 響。
 （略）若依^ニ所注反音^ニ者、無^シ耶^ノ響。直^ニ有^ル阿^ノ響也。所以^ニka 等^ノ字直成^カ賀^ノ等^ノ音^ト。（略）是南天音^ノ也。

(20b) の説明によると、ka は中天（竺）の音で「キヤ」、南天（竺）の音で「カ」と読むという。つまり、ka は「カ」とも読めるが、それは梵語の地域差によるといことのようなのである。馬淵（1984）によると、悉曇章の対注漢字はどの時代を通して多くが「迦」字を用いている。ここから ka の梵音が /kia/ であった可能性を指摘している。

悉曇文字の併記された五十音図のなかには、カ行に ha を並べているものもあ

(注25)

る。ただしその場合もア行の直後に置かれることが多いので、「ka-カ」の排列が根底にあるものと考えられる。なぜkaを取ったかの言及は当然ながらないため推測であるが、悉曇文字の切継ぎは、子音第一の文字であるkaを代表に説明される。kaが最もよくあらわれる文字のため、haよりも尊重されたものであろうか。また、ka、haともに「喉音」とされるが、kaが五類声に対して、haは遍口声である。日本語のカの調音方法に合わせた可能性も考えられる。いずれの可能性も、もう少し精査が必要である。

5. おわりに

音訳真言とその訓点についての研究は、音訳漢字の字音との比較でおこなわれることが多いが、実際は梵字、漢字どちらに依拠して読まれていたかは語ごと、音節ごとに異なり、実態は複雑である。そのため、漢字対訓点ではなく、梵語を単位として検討するべきである。

真言の読誦は、經典そのものの意味や実用を修行する場でのものであり、日本人の直感的な読みが現れやすい。これと対照的なのが悉曇学という研究の場である。これは現代の中学高校における外国語学習と、大学等で専門的に研究された外国語との違いに相似している。より専門的な観察や分析に基づく記述は、日本語史研究の資料として重要であるが、一方で、日本人の素直な感覚もまた、日本語の音韻体系の実態であるといえる。

本稿では五十音図のワ行の排列を、音訳真言の仮名点と比較してみた。大矢(1918)では、五十音図においてvaの位置にワ行があるところから「是當時のワ行の音の、現時の如くならで、ワ(v)なり」と推定している。たしかに当時の日本語の音韻を検討する際、たとえばハ行のように悉曇章との対応が大きな手がかりのひとつになりうる。しかし、真言の訓点ではvaはバの音に近かったことを示しており、必ずしも悉曇学の観察が日本語の音韻を反映しているわけではないこともわかる。

これまであまり研究のされてこなかった真言の訓点であるが、悉曇学書などと記述を照らしあわせることで、日本語史がより詳細に記述できるようになると期待する。

(注1) 経文中ではふつう悉曇文字(siddhamātrikā)が使われるが、ローマ字転写によって表記する。ローマ字転写には、インド学で一般的に使用されているものを用いる。

(注2) ただし口蓋音は、単純な破裂音ではなく、破擦音で、日本語のチャ行のような発

音である。

- (注3) 伝承では、玄奘が「五種不翻」という翻訳理念を唱えていたとされる。意訳すべきでないものが5種類あるというものである。『翻訳名義抄』（南宋法雲 1143年 成立 大正新脩大蔵経54巻 No.2131）によると、

1. 秘密であるため。たとえば陀羅尼のようなもの。
2. 多義語であるため。たとえば薄伽梵は6通りの意味をもつ。
3. 中国にそのものがないため。たとえば閻淨樹（ジャンプ樹。空想上の大樹）のようなもの
4. 慣例に従うため。たとえば阿耨菩提は、訳せないことはないが、古来より訳さない。
5. 善業を生じさせるため。たとえば般若と訳せば莊重であるが、知恵と訳すと深みがなくなる。

のいつつが挙げられている。これらに該当するものは音訳される。玄奘が説いたものとは断定できないとはいえ、唐代の訳経に影響を与えている。（船山2013）

- (注4) 使用文献については（6）参照。

- (注5) 使用資料中には梵語による記述はない。そのため対照させる梵語原語の比定は、『真言事典』（八田幸雄、1985、平河出版）にあるものはそれを基に、『真言陀羅尼』（坂内達雄、1981、平河出版）、大正新脩大蔵経所収の悉曇文字、Monier Williams Sanskrit Dictionary、梵語文法などを用いておこなった。ただし、活用や sandhi などによって母音の長短が不確実のものもある。原語不明のものは調査対象から外した。

- (注6) 石山寺蔵「金剛頂蓮花部心念誦儀軌寛平元年（899）点」

- (注7) （）内は外題。外題を呼称として用いる。

- (注8) 大正新脩大蔵経によると唐の法全撰

- (注9) d と e は資料名が同一のため「甲乙」をつけて区別する。

- (注10) 大正新脩大蔵経によると唐の法全撰

- (注11) ただし金剛界儀軌乙には声点はない。

- (注12) 崎村（1978、1978）によると、漢文本文や仮名点に差された声点は呉音系の声調を反映しているようである。

- (注13) ただし、音調は流派ごとに異なるようで、（9）はすべて西墓点の資料であるが、東大寺三論宗点の大毘盧遮那広大成就儀軌では jñā 枳嬢 [平平] となる。

- (注14) ra の読みは、伝統的にアを添えることがある。『悉曇字記』（後述）に「ra 囉 曷力下反三合」とあり、r- の半体を体文の上に重ねた字（rka など）を「阿勒迦」と音写するように、中国悉曇学の影響によるものである。田久保（1944）では、中国のこのような音写について「斯る音寫の異例は滑音即ち彈舌音囉（ra）字を急速に初發し得なかつた漢土の語系的缺陷を補助する爲めに」行われたと述べる。

- (注15) 悉曇章とは悉曇文字の一覧表のことをいい、母音や子音の切継ぎなどを説明したものである。

- (注16) ただし、行の排列は初めから（12）のようであったわけではなく、大矢氏をはじめとする諸氏が指摘するように、特に中世では様々な排列が行われていた。

- (注17) 同じ半母音でも y、r、l には複声点は現れない。

- (注18) 仮名点のあらわれる v- の音節のバリエーションは以下のとおり（母音の長短をまとめて ā のようにあらわす。以下同じ）

v, vā, vāṃ, vān, var, vī, viḥ, ve, vai

- (注19) 「ラ」「ラハ」はともに「薩𑖀 (sarva)」に見られるもので、音訳に明示されていない(薩の t 韻尾であらわされた) r を読んだものである。その他 2 例はその対訳漢字から、真言に異同があったものと推測され、va を音写したものではないと考えられる。マ行音形の出現は、(11) と同様に、音訳漢字の字音によるものである。
- (注20) 仮名点のあらわれる b- / bh- の音節のバリエーションは以下のとおり。
ba, bāṃ, baṇ, bi, bu, bud, bo
bh, bha, bhī, bhiḥ, bhir, bhū, bhe, bho, bhyāḥ, bhyo
- (注21) マ行音形の出現については、(11) および注19参照
- (注22) □ 内は割注。以下同
- (注23) 注18参照
- (注24) 「ka-カ」の 1 例は、ka に「賀」を充てたものである。「賀」は普通 ha の音訳に使われる字であり、調査の範囲でも「ka-賀」はこの 1 例のみである。そのため、加点者が原音を ha と誤解して「カ」と読んだものと考えられる。一方、「ha-キャ」の 1 例も「賀」を充てたものであり、上記の説明に反する。しかし、これは「僧賀 (sim-ha)」という単語であり、同真言中に(厳密にはここは陀羅尼)「僧伽 sam-gha」が複数回出現するので、これと混同したものとも考えられる。
- (注25) なお、醍醐寺蔵孔雀經音義卷末の音図に「𑖀キコカケク」とあるのは有名だが、「𑖀」は主に hi の音訳に充てる字で、五類声には使われない。ただし、孔雀經音義の音図は先学たちの指摘するとおり、排列の違いや不足音があるところから、悉曇学とは別のところで作られたものとする。

参考文献

- 大矢透 (1918) 『音図及手習詞歌考』大日本図書
- 勝山幸人 (2012) 「悉曇章と五十音図」『アジア研究』7
- 崎村弘文 (1978) 「呉音声調の国語化と訓点資料——儀軌類を中心に——」『語文研究』四四・四五合併号
- 崎村弘文 (1979) 「九州大学所蔵儀軌類について」『訓点語と訓点資料』62
- 田久保周譽 (1944) 『批判悉曇学第一部論説篇』眞言宗東京専修學院
- 沼本克明 (1986) 「陀羅尼の音読と加點」『日本漢字音の歴史 第二章 第四節』東京堂出版
- 沼本克明 (1997) 「陀羅尼の加點法」『日本漢字音の歴史的研究——体系と表記をめぐる—— 第六部 第二章』汲古書院
- 沼本克明 (2003) 「梵語の四声点」『国語と国文学』80 (9)
- 沼本克明 (2012) 「梵字資料の四声点——漢語四声表示機能と梵語長短表示機能——」『平成二十三年度高山寺典籍文書綜合調査団 研究報告論集』高山寺典籍文書綜合調査団
- 船山徹 (2013) 「仏典はどう漢訳されたのか——ストラが經典になるとき」岩波書店
- 馬淵和夫 (1984) 『増訂日本韻学史の研究 I、II』臨川書店
- 馬淵和夫 (1993) 『五十音図の話』大修館書店
- 馬淵和夫 (2006) 『悉曇章の研究』勉誠出版
- 水谷眞成 (1994) 「梵語音を表わす漢字における聲調の機能——聲調史研究の一資料——」『中國語史研究——中國語學とインド學との接點——』三省堂(初出は『名古屋大学文

学部二十周年記念論集』昭和43年12月)

使用文献

『在唐記』(840-845) 円仁(叡山無動寺蔵 平安末期写本(『悉曇学書選集』1所収))

『悉曇要集記』承暦3(1079) 寛智(馬渕和夫氏蔵 建長2(1250)写本(『悉曇学書選集』2所収))

『悉曇大底』応徳元(1084) 明覚(叡山文庫蔵 永暦元(1160)写本(『悉曇学書選集』2所収))

『梵字形音義』承德2(1098) 明覚(東寺観智院金剛蔵 建長2(1250)写本(『悉曇学書選集』2所収))

(ひるぬま めい・九州大学人文科学研究院助教)